

Global Place 海外研修生の報告から

～海外駐在初心者が感じたこと～

国際部 鈴木 隆之

「読者の皆様、いかがお過ごしでしょうか。私は OJT 研修生としてサニーベール事務所に派遣され、現在、カリフォルニアのまばゆいばかりの太陽のもとで、英語と仕事に奮闘しております。ここサニーベールは、サンフランシスコからフリーウェイ 101 を車で 50 分ほど南に下ったところに位置しています。冬季を除いてほとんど雨が降らず、しかも温暖で湿度が低いためアメリカ全土の中で最も快適な気候に恵まれていると言えます。事務所の周りには、広い道路と緑の芝生をはさんで、Intel、Signetics、National Semiconductor、HP、AMD、GE、Data General 等、聞きなれたハイテク関連企業が面白いほど軒を連ねています。…」



出典: iStock <https://www.istockphoto.com/jp/%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%88/silicon-valley>

これは 40 年近く前、会社の事業部が発行する特約店や営業マン向け月刊誌に掲載された私の寄稿文の出だしです。今だと、Nvidia、Tesla、Alphabet/ Google、Meta/Facebook、Apple、Oracle、Adobe、Cisco Systems、Uber、eBay などの名前が並びそうです。私は、1986 年 4 月から 1 年間、OJT 研修生として毎月海外派遣研修定期報告を提出していました。今、あらためて読み返してみると、我ながら思わず微笑ましくなってしまうようなところがありましたので、当時の海外駐在初心者の私が実感したことをいくつかご紹介したいと思います。

【海外駐在初心者の私が実感したこと(「」内の文章は月報からの抜粋文)】

1. 人の印象を気にする人たち(英語研修で 5 週間滞在した学生寮での経験)

「概して言えることではあるが、アメリカ人は、周りの人たちが自分についてどう思うかということについて極めて神経質で、私のルームメートも朝起きると“Good morning.”、部屋を出る時は“See you later.”、戻ってくると“How are you doing.”、寝る時は“Good night, see you tomorrow.”と、日々の挨拶をほとんど欠かすことがなかった。クーラーをつける時にも必ず一言“寒かったらいつでも消してくれ”と声をかけてきたものである。他の学生も、たとえ面識がなくても、すれ違いざまに“Good morning.”とか“Hi!” と声をかけてくる。当初は少し戸惑ったが、これも一種の社会習慣で、アメリカ風対人法なのであろう。」

2. 名前を覚えること(販売会議の立食パーティでの印象)

「現地の人たちと会話すると、いつも人の名前を覚える早さに驚かされる。一度挨拶をして名前を言うと、その後会話の端々に相手の名前をはさんでくる。現地の人たちにとって名前を覚え、覚えられることは一つの貴重な財産になるようだ。」

3. 人の話の聞き方(職場で)

「アメリカ人社会の中で働くのに重要な心掛けの一つは、人の話を最初から最後まで一生懸命聞くことだろう。ここは特に自己主張の強い国で、自分を主張しないと存在価値のない人間と思われるところがある。それだけに、自分の言いたいことは何とか人に聞いてもらおうと努力するし、聞き手も一様にそれなりの姿勢で聞く。従って、これをいい加減な態度で聞いたり、話の途中で引き揚げてしまったりしたら、その人を無視したことになるし、ひいては非常識な人という烙印を押されることにもなりかねない。積極的に耳を傾ける態度を示すと、話好きな人たちは次にもやってきていろいろな話をするようになるし、こちらの反応如何では頼られるようにもなってくる。従い、これは現地人の信頼を得る初歩の心掛けだと思う。」

4. 人に何かを伝える時(職場で)

「二つ目の心掛けとしては、何か現地の人に伝える時は、途中を省略せず 1 から 10 迄すべて説明することであろう。ここ迄言えば過去の経緯から理解してくれるだろうという考えは、基本的に持つべきではない。何か条件がある場合には、面倒でも必ず関連する話をする度毎に繰り返しその条件を述べる必要がある。例えば、新製品開発スケジュールを連絡する際にも、【注意】として、「本スケジュールは工場側の事情により連絡無しに変更する可能性があります。」と書き添えとか、「次の見直しスケジュールはxx月xx日頃連絡します。」とか付け加えれば非常に分かり易い。こうした連絡が常になされていれば、個々の変更に対し不満は生じても、理解されるであろう。文章/言葉の表現方法についても同様のことが言える。日本語で時々見られるような相手に内容を押し量らせる表現は、受け取った側が困惑するだけである。現地では、断定的な表現とその説明(○○○である。Because △△△。)が望まれる。説明不足や、行間は、その情報がいろいろな人を経由する間にいかようにも変わってしまうので、このような点に気を配り、そのまま客先へ流せる形の情報提供が、現地側でいらい誤解や日本に対する不信感をなくす近道である。」

5. 担当者の仕事の進め方(職場で)

「各担当者の責任範囲が Job Description によって明確に決められていて、各人はその範囲内を完全にカバーすることが期待されている。日本に比べ各人の守備範囲は極めて狭いように見えるが、それを 100%カバーするために、個人資料を作るなどいろいろ努力している。従って、社内での情報の行き来は通常は極めてスピーディで、何か他部門に照会すると、さっと回答が返ってくる。担当者数は多くなるが、処理速度が速い分だけ多くの仕事がこなされる。一方、日本では一般に個人の処理能力以上の仕事を抱え、自分で優先順位をつけて仕事を進め、処理しきれないものは、督促を受けるまでほっておかれる。この 2 者がやりとりを行うと、どうしても日本側の応答が追い付かなくなり自然と現地担当者側に不満がたまるようになる。日本側の上手な対応が必要である。」

6. 上司への対応(職場で)

「通常は、上司に極めて従順である。上司から言われたこと、言われそうなことに素早く対応する。上司がほぼ 100%部下の制裁と奪権を握っているからで、上司についていけない部下は、解雇されるか、自分から会社を離れていく。上司に見込まれている人は、上司が転職した場合に上司にくっついて転職するケースもしばしば見られる。また、現地で親しくしてくれる人ができるとつい何かと頼ってしまうことになるが、自分

の部下の対応が良いので、仕事ができていると、自分以外の人には役に立っていない場合もある。評価などする場合には、できるだけ社内外の複数の人たちから情報を集めることが必要である。」

上記抜粋文以外にも、私の報告書は業務関連にも触れており、当時日本に比べて進んでいた業務のコンピューター化、ビジネスリエンジニアリングについての記載が多かったです。今であれば、AI エージェントが主役になっていたかもしれません。

よく聞くような初歩的な話を書き連ねてしまいましたが、読者の方々が私と同じような感想を持っていただけると、うれしく思います。

以上